

第3章 研究の成果と課題

研究のまとめについては、各事例の末尾にある「一年を振り返って」に記載されているので、ここでは研究の成果（☆）と課題（★）を明記し、来年度以降の研究につなげていきたい。

1 友達とかかわり合いながら創る生活プランの作成より

☆ 昨年度に作成した「月の指導のまとめ」を全員で検討し、私達の園の指導計画を作成することができた。（指導計画については、別冊を参照のこと）

★ 昨年度はっきりした11の視点の関連性、質の違いについては、各学年のスローガンに照らし合わせて視点を1つ、あるいは2つに絞った時点で、学年による重要度がはっきりとしてきた。例えば、保護者との連携については特に3歳児のときに意識して取り組んでいくことが、3年間の幼児の育ちの支えとなるであろうことが見えてきたこと（事例P15～P23）などである。しかし、まだ十分とはいえない。今後の課題の一つである。

★ 作成した友達とかかわり合いながら創る生活プランをもとに今後も保育を積み重ね、目の前の幼児の姿とのずれを修正しながら、更なる指導計画の改善を図っていきたい。

★ 一昨年度からのボトムアップ形式の研究なので、現段階の指導計画については共通理解ができてきているが、教育課程については、平成5年度に作成されたものに準拠したままになっている。それを、今日的課題と照らし合わせながら、今の状況に合ったものに再編成していく必要性を感じている。

2 事例検討より

☆ 5歳児の事例から、ルーティン的な活動の意義が見えてきた。自分をなかなか表出できない子を支える活動として、枠がはっきりしている活動は見通しがもてる分安心して活動できる。することで誉められ生活に自信がつく。他者に対して自分を開いていけるようになる。

そこに、窓口の一つとして「つどい」が有効に機能したと考えられる。集いでは教師が存在するために、教師が支えてくれる。そうすることで一人一人がみんなの前で考えや思いを伝えられたのではないか。

☆ 3歳児の事例から、家庭との連携の重要性が見えてきた。とりわけ、入園してから一年間という期間は、保護者にとって分からないことが多く、それゆえ不安が募る。その時に子どもを育ちを第一に考えながら互いに思いを伝えあうことは、信頼関係を構築することにつながる。それが幼児の姿に現れるのである。

☆ 4歳の事例から、イメージの世界をより豊かにするためには「もの」や保育室の環境構成が重要になってくることが見えてきた。

★ それぞれの事例を検討する中で、個と集団のあり様、相互に影響し合い連関し合いながら熟していくプロセスの大切さについて改めて気付かされたと同時に、そういったプロセスを十分に保障してきたか省みながら今後の保育に生かしていきたい。